

森を守る

ササユリは里山生態系の象徴

市北部・福井県境に近い「山門水源の森」で調査・保全活動を行う「山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会」。その事務局長を務める藤本秀弘さんが、初めてこの森に調査に入ったのは1987年。以来27年にもわたり活動を続けています。

山門水源の森は、さまざまな植物の北限・南限が交じり合う場所で、生息する昆虫も種類が多い。こうした環境は学術的にも、また、子どもたちの学習の場としても保全していく意義は大きいといえます。

「日本固有種のササユリは、かつて身近な花だったんです。私たちが子どもの頃は、家の裏山なんかにはたくさん咲いていました。それが、今では珍しい花になってしまった。この森でも、人が入らなくなってからは、数十株しか見られなくなりました。しかし、きちんと草刈りをし、適切に種をまけば育ちます。」



ササユリ

里山保全について考えるきっかけになればと、見学に来てくれる人にはこのことを話します。」



森を案内してくださった藤本秀弘さん



モリオアオガエルの卵が入っている泡の塊

森を育てる・活かす

2007年秋、湖北町小谷上山田に「どっば村」を開いた。「米も作る大工」清水陽介さんと「家も建てる農家」松本茂夫さん。

山里の資源を生かし、一人ひとりが自由に生きられる社会・若い人が育つ場をつくろうと始まったこのプロジェクトへの思いを伺いました。

昔から里山にあった 当たり前前の暮らしをやっている、 それだけなんです

「自分が食べる米は自分で作る、自分が住む家は自分で建てる」というコンセプトのもと、全国から若者たちが集い、働き、学び、暮らしているのが「どっば村」です。彼らは自分の暮らしを自分の手づくり、独力でできることの範囲を広げ、生き抜く自信をつけてい



松本茂夫さん(左)と清水陽介さん



どっば村で最初に自ら建てた家。ここに塾生が下宿している

きます。

建築には、四季を取り入れるという農の発想が必要だし、農業には農舎を建てるなど建築の要素も欠かせません。農業と大工の両方を手掛けるのはごく自然なことで、当たり前前のことを当たり前前に行っているだけ。

経済性や効率性が優先され、大量生産、大量消費の時代になりました。手間をかけて自ら作りださなくても何でも手に入り、それでいて安い。そんな便利さを求め人々は山里を離れ、人がいなくなった場所は荒れていくのです。

こうした状態は、社会全体の能力は上がっても個々が生活するうえでの能力は下がっているように感じるし、社会が大きく変化したときの生活に柔軟に対応できるか不安を覚えます。

里山の自然を活かし、昔から里山にあった当たり前前の生活を営む…そんな「どっば村」での暮らしを通して、環境

森を守る活動の成果を 次の世代が見届けてくれれば それでよし

もともと京都で教員をしていた藤本さんは、会員とともに地元の小学生によるブナの植林を手助けしています。「春に小学生が植えに来ます。苗を植えた100人のうち1人でも、将来この森に目を向け、保全に取り組んでくれたら、「引き継ぐ会」の活動としては成功ではないか」

そう話す藤本さんの視線の先にあるのは何十年も先の未来。今の活動の成果を自分自身が見届けることはできないかもしれない。でも次の世代の人たちが、見届けてくれればそれもよし、と活動を続けているそうです。

「子どもたちが植えた苗に水をやるのも、仕事のひとつです。子どもたちが次に来た時に枯れていたら、がっかりしてしまうから…」

そう言いながら笑う藤本さんの横顔には、「先生」としての深い愛情と「森の番人」としての使命感があふれていました。



四季の森

に対する配慮など、若者たちが未来に対して責任の持てる仕事のやり方を身につけ、自ら生き抜く力をつけてくれればと願っています。ここで育った若者が増えれば、再び里山にも人の手が入り、必然と山が生き返るのではないのでしょうか。



木工房 結 一般のワークショップも開催する

地元産・国産の木を活かした、こだわりの家に住む速水馨さんご家族。
木の香りに包まれて感じることを伺いました。

森の大切さが知識から 実感へと変わりました

この家を建てる前から、「外材を使えば、外国の森林を破壊し、運搬にエネルギーを余分に使うってしまう。だから、国産材を使った方がよい」ということは知っていました。でも、家づくりを始め、住むようになってからは、地元産材の良さとそれを使うことの重要性を実感しています。ここで育ち、呼吸し



速水さんご家族。木の家は裸足が気持ちいい

てきた木は、この土地の気候に合っているに違いないですし、森林の保全にもつながっている。暖房用の薪を調達する必要のあるからというのが大きな理由ですが、木や森林への関心が深まりました。森林組合の活動について調べたり、間伐がされているかどうか気がなったり…

薪は、シーズン中の月に2回、仲間と一緒に薪割りをして調達します。ほかにも近所の人々が「薪いらんか」と声をかけてくれたり、間伐材を分けてくださる人が現れたり、人の輪が広がりました。

自然環境保護というと大それた感じがしますが、地元の気候・風土に合った家で、なるべくエネルギーを無駄遣いせず、燃料に間伐材を使うことが少しでも森林保全に役立っているなら、うれしく思います。



中央湿原の様子。この他北部湿原と南部湿原と計3か所の湿原がある